

Title	フィリップ・ウォルフ ツールズにおけるイングランド産の毛織物
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.10 (1951. 10) ,p.619(67)- 620(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19511001-0067
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19511001-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Representation of Balance of Payment Policy, *Economica*, Nov. 1949) 即ち、契約曲線上の貿易均衡點は國際收支のあり方を考慮するべき、國際收支の不均衡をマニシヤル援助などによる信用供與によつて調整されてゐる「支拂不均衡點」として現わされる。こゝでミードは形式上均衡點であつても、本来「支拂不均衡點」であるところのものが、國際收支の調整策が講じられた場合に如何に變化するかを説明しようとする。勿論これによつて變化する契約曲線上の兩國國際交換均衡點の推移は、國民所得を一定とするかぎり輸入品に對する需要の弾力性に依存するであろう。そのために十の圖表が作成されてゐる。しかし單に均衡點の位置の變化だけでなく、支拂不均衡點と均衡點との間の比較が行われ、兩國の利益の指標が求められる點、たとえマニシヤル——レオチエフ——ハーバラーの幾何學的説明の適用を出ないとしても、貿易政策の效果分析にこれを援用した試みは新しいものといわざるを得まい。最近のミードが好著 *Balance of Payment, 1951* に次いで發刊せるこの種の試みの集大成は期待されるべきであらう。

四

政策效果分析の最近における今一つの問題は、政策手段の選擇に關するそれである。衆知の如く、國際收支の不均衡改善には種々の政策手段が用いられる。この場合でも、二つの立論の

仕方が考えられる。その第一は如何なる政策手段が國際收支の不均衡改善に效果的であるか、という比較検討、第二は同じ不均衡改善の手段でもどちらが *better off* であるかという比較検討のそれである。しかしこれらは屢々第二義的に扱われて來てゐる。というのは、國際收支の不均衡の改善を自體、一層廣範な政策基調によつて判斷され、高次の安定的經濟活動水準とか完全雇傭政策の視點から、國際經濟政策という廣い場面で扱うことを求められてゐるからに他ならない。そこでは、右のよるな貿易政策に固有な問題が、その背後に押しやられる傾向は少なからぬところである。それにもかゝらず、事實はこれらの問題に對してならんかの理論的解明を要求してやまないであらう。第一の比較検討はこれまでの純粹理論の接近を容易に許すけれども、第二のそれは前述の如き量的な效果分析をもつてしては必ずしも期待し得ないかも知れない。例えば、あまりに明瞭な相違をもつ二つの政策手段の比較は別として、輸入のための外貨費消制限と爲替平面切下との比較は容易ではない。(Sidney S. Alexander, *Devaluation Versus Import Restriction as an Instrument for Improving Foreign Trade Balance*, Staff Paper, vol. 1, No. 3 April, 1951) ことに貿易政策の厚生費用分析が多大な役割を演ずる所以を指摘することが出来るのである。それは矢張り貿易政策の面における價值體系の問題を暗示するものではなからうか(未完)

論文紹介

フィリップ・ウォルフ

『ツールーズにおけるイングランド産の毛織物』

(Philippe Wolf, "English Cloth in Toulouse,"

Economic History Review, 2nd Series, Vol. 2,

No. 3, 1950, pp. 290-294.)

中世イングランドにおける毛織物の輸出については未だよく知られていない。然し早くも第十四世紀以來イングランド産の毛織物はツールーズにおける重要な輸入品の一つとなつて來た。ガロンヌ上流地方に關する現存資料も亦ツールーズにおけるイングランド産毛織物の掛買が盛であつた事實の一端を示している。

イングランドはツールーズに毛織物を供給し、そしてツールーズの界限に産する必要な大青を得てゐた。イングランド西南部のサマセットやデヴォン産の毛織物はブリストル港から積出され、ハムプシャやウィルトン産のものはサザムゲトン港から、又イングランド東南部のイースト・アングリヤ産の毛織物はロンドンかコルチェスター港から、いづれも南フランスのベイヨン港へ送附されたのであつた。そして一旦ベイヨンの波止場に陸揚された毛織物は大抵はモルラーヌ、オルテー、オ

ロンの商人に引取られ、ペアルン地方の人達の手により直ちにゲーブ・ドゥ・ポーに沿つて運ばれ、タルブでアドゥール河を横切り、それから後はガロンヌの上流を下つて目的地のツールーズまで持つて行かれたのである。

ツールーズに運ばれた毛織物の主な色合は赤・淡・紅・黒・緑・淺藍であり、赤褐色や深紅色のものもあつた。又その品種は様々であるが、主なものには濃・赤のモラトウス、豫め違つた色に染められた糸で織られるメスカラトウス、イースト・アングリヤに産する幅の狭いドツェナ、黒のグレダ、赤のヴォヤ、それから一四三〇年から三六六年にかけて始めて現われた様々な色の最も廉價なルエラであつた。價格に關していへば、ブルツセル産モラトウスが一カン (gannes, 一・七九六メーター) 三磅一志五片に對しイングランド産のそれは三磅であつて、僅かではあるが廉かつた。又イングランド産のルエラは、當時一カンにつき一磅七志六片から一磅の間を上下していたラングドックの普通品よりも更に低廉であつて僅か十一志三片という廉價であつた。これ等の他は一カンにつき二磅十六志三片から二磅五志の間の價格で、全般に變動が少なかつた。しかも品質は確實であつた。従つて中産者に特に喜ばれ、ツールーズを中心に廣く愛用されていた。結局北はカオール、ロデー、東はカルカソンヌ、南はピレネー、西はコンドームを結ぶ廣い範圍にイングランド産の毛織物が消費されていたのである。

ツールーズへのイングランド産毛織物の輸出は一四一三年から三七年の間に特に著しかつた。これ以前はフランスやブラバン産の毛織物に壓倒されてツールーズの全輸入量の多くを三〇%が精々であつたが、この時期には全體の五〇%以上を占めるといふ躍進振りであつた。然し一四三八年から五〇年の間にはノルマンディーやラングドック産の毛織物に凌駕されている。但しこれはフランス國産品進出による相對的低下であつて、供給の絶對量は實は漸次増加していたのである。

(渡邊國廣)

ローレンス・ストーン

『エリザベス朝の海外貿易』

(Lawrence Stone, "Elizabethan Oversea Trade,"
The Economic History Review, 2nd Series, Vol.
2, No. 1, 1949. pp. 30—58.)

II

エリザベス朝の商業は經濟史研究の分野に於ける重大な盲點の一つとなつてゐる。それ以前の時代即ち第十五世紀及び第十六世紀初頭について既に近くはパワー、ポスタン更に當てはシャンプ等により幾多の優れた業績が提示されたに反し、この時代については殆ど何らの解明も行はれてゐない。それは決して

エリザベス朝初期の海外貿易には二つの重要な性格が窺はれる。その第一は、二百年以前と比較した場合、海外貿易の内容が甚だしく變化を來してゐる點である。第二は、戰爭財源に金を蓄積すべき時代であるのに、當時貿易額は一〇萬ポンドを超える逆調を示してをり、その原因が全く外國商人によつて齎らされる贅澤品にあつたことである。

先づ輸出面に於いて、往時その九五%を占めて王座にあつたのは羊毛と羊毛皮であつたが、當時はこれが一〇%以下に落

ち、代つて毛織物が七五%を占めてゐた。他に鉛と錫が共に五%弱である以外にいふべきものはない。従つて輸出に於ける毛織物の獨占的地位、ひいてはかの農業革命と工業化の顯著な趨勢が認められる。

これに對し輸入の方は遙かに複雑であつて、支離的といひ得る商品はなく、(一)亜麻糸とその原料が一七%、(二)毛織物工業及び染色工業の原料即ち油・大青・茜草・明礬が一三%、(三)葡萄酒一〇%、その他雑多な副食品とか鑛産物とか贅澤な織物等々があつた。これ等の大部分は氣候その他の關係からイングラントでは生産不可能のものであると共に上中階層の要求する品々であつた。従つて初期の海外貿易は、單一生産物たる毛織物と極めて雑多な諸商品との交換に外ならなかつた。敢ていへば、貿易收支は全々ヨーロッパ大陸諸國の購買力如何に依存し、若し毛織物の輸出が一〇%でも變化すれば貿易バランスも完全に逆轉せざるを得ない運命にあつたのである。

しかも右の輸出入品は當時の大中心市場であつたアントワープを経由するものが多く、全體の三分の二は一度そこを送られ残餘はフランス(主としてフルーアン、ラ・シェル、ポルドー)とスペインに向つた。そしてこの場合、商品の移動及び賣買に當る者は殆んど凡て外國人であつて、イングランドの商人の果たした役割は極めて受動的なものに過ぎなかつたのである。このやうな大陸諸國への依存に加へて、フランス商品(贅澤品)を

資料がないためではない。近世國民國家成立期たる當時の内外諸事情、わけても戰費調達の見地よりする貿易收支の算定と見透しとか經濟封鎖に對處すべき自給性の検討といった喫緊の事態は、爲政者をして正確な數量的把握の要を痛感せしめ、その諮問に答へるため各界識者によつて多數の報告書が作成されたのであつた。この傾向はかのバリー卿の先鞭を受けて開始され、一世紀後の統計的諸研究に於いて實を結んだ。従つて資料は寧ろ甚だ豊富であるといひ得るであらう。この時代の解明を妨げてゐるのは資料の不足ではない。その未整理の状態にあるのである。故に各資料の性格と相互の關聯を慎重に吟味しつゝこれ等を驅使するならば、そこに或程度の餘りを期待することも亦可能であらう。

買ふ場合は主に地金を流出せしめねばならなかつた。ここに逆調となる抑々の因が潜んでをり、これの補正手段としては、フランス以外の地域で毛織物による優位を保持すること以外にはなかつた。以上が初期の大體の状態であつた。

III

W・R・スコット教授はエリザベス朝の貿易を分析し、短期・中期・長期の波動を検出してゐる。もし初期について行つたと同程度に他の年度についても解明し得るならば、吾々はスコット教授の業績を検討しこれを評價することが出来る筈であるが、残念なことに根本資料からの轉寫と整理が未だそれまでに進捗してゐない。ただ末期に關しては、不完全であるとはいへロンドンの輸出入統計があるから、これに他の斷片的資料を加味すれば、長期波動については或程度吟味を加へることが出来る。然しこの場合、多くの商品が數量的に表はされてゐるだけであつてそれ等の價格は不明であり、ために初期で行つたやうに各品目相互間の比重を把むことは出来ない。ただ初期に比較した品目の異同とか或ひは各々の量的増減を知ることが可能である。こゝにはこの點から若干の推測を加へる。

先づ輸出から見ると、初期にはなかつた新しい工業製品が若干現はれてゐる。最も著しいのは新織物類(薄羅紗・靴下等)であり、他に鑄鐵製品・麥酒・石炭等も重要性を増してゐる。